

にぎわい

—日本海にぎわい・交流海道推進協議会通信—

会員だより

千年余年の歴史とロマンを秘めた文化の香る港 ～青森県深浦港～

古来より、日本海航路の寄港地・風待ち仮泊港として天然の良港を誇り、「北前船」といわれる帆船の出入りで港は大いに賑い、大坂や京都などからの文化導入の表玄関として発展し、江戸時代には津軽四浦の一つに指定され、港を一望できる高台には奉行所が定かれた。



深浦港の西、山のふところにある円覚寺は、大同2年(807年)に坂上田村麻呂が津軽蝦夷討伐の拠点を深浦におき、陣中で使った「かけ仏」と聖徳太子の作といわれる「十一面観音」を安置させたのが、寺の起源と伝えられています。

北前船での航海の安全を祈願するため、船乗りもお参りしたといわれ、船絵馬としては日本最古の「北国船の

船絵馬」(国の主要有形民俗文化財)も奉納(1633年)されています。その後も代々の津軽藩主は、深浦港とともに円覚寺を手厚く保護したといわれています。

深浦港を利用する船舶は、動力船の普及に伴い、明治末期に激減したが、その後、内航海運及び水産業の発展と共に港外沖合いを航行する船舶が増加し、昭和10年から20年代にかけ、深浦港の周辺海域で商船や漁船の海難が続発したことから、地元の人々の間に避難港築港運動が盛り上がり、昭和26年に全国14の避難港の一つに指定され、緊急に整備することとなった。

そして、国の直轄事業として昭和28年度から防波堤の整備に着手し、現在は東防波堤(200m)、西防波堤(400m)、1千~2千トン級の船舶2隻と小型船舶10隻が同時に避難できる約25万m²の遮へい水域の完成をみており、近年の船舶の大型化に対応した新たな防波堤の整備を期待しているところです。

また、平成5年に世界自然遺産に登録された「白神山地」を沖合いから望め、海・山の変化に富んだ美しい風景につつまれた古の響きをもつ港です。

(青森県深浦町建設課 赤平)

みなとのリノベーションと東京湾 ～横浜ランドマークホール～

去る3月30日横浜ランドマークホールに於いて、東京湾港湾連携推進協議会シンポジウムが開かれました。協議会は年2回、東京湾内諸港が緊密な連携を取る事により、広域的かつ総合的見地から東京湾地域の適正な開発、利用及び保全に資する事を目的として設立したものであり、今回は「みなとのリノベーションと東京湾」と題してシンポジウムが開催されました。

今回のシンポジウム前半部「港湾におけるリノベーションの方向性」として今野修平教授による基調講演、後半部は前田二建局長を含めたパネルディスカッションが行われ、会場には多くの聴講者が訪れ「みなと」への関心の高さを感じました。

東京湾ではこれまで親水的空间が少ないとわれ続けているなかで、最近の不況の影響から臨海部の遊休地化が進み、賑わいがなくなってきたことに警鐘を鳴らすことを目的として、このシンポジウムで今後どうあるべきかを各分野で活躍されている先生方からの意見を基に討論されました。

この中で感じた事として、マーケット、景観、地価、流通等あらゆる視点からの検討していく中で、商業的施設も1つの案ではありますが、臨海部のメリット(内陸部より平坦で広い土地が確保しやすい、また海が近い)を生かしながら、結果としてごく自然に市民が集まる広場がそこにあればといいと思います。それには多くの問題を抱える中で、自然を大きく取り入れた中に小さな施設を考え、今後人々がにぎわえ続けることが出来る空間を創出していくことによって、そこにまた新たなにぎわいが生まれていくという、好循環がそこには隠れている気がします。

開発ではなく最大限自然に戻していかなければ素敵ではないでしょうか。

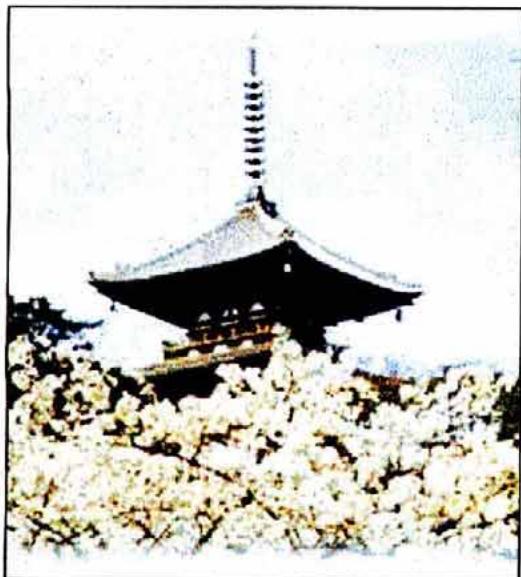
(二建 海域環境課 松森)



編集後記

今回の発行に当り、「日本海のにぎわい」として当局では青森県の西海岸地域と限定されてしまうなかで、青森県深浦町の歴史やロマンについて紹介させて頂くとともに、にぎわいという視点から横浜で開催されましたシンポジウムについて自分の意見を述べてみました。

様々な視点や意見を基にしながら今後の「日本海のにぎわい」について考えていき、またこの紙面を通じ、より繁栄ある日本海にぎわい・交流海道が続いているべきだと思います。



日本海にぎわい・交流海道推進協議会 事務局
第二港湾建設局 海域環境課

TEL 045-211-7427
FAX 045-211-0204